

俺はなんとか夏姫の手コキから逃げ出し  
自室でへ□へ□になりながらもバイトへ向かう準備をしていた

「はあはあ…、さっきのは色々ややばかった  
激しかったけど凄い気持ち良かったな  
お願いしたらまたしてくれないかな…？」

いけないまた先ほどの快感を思い出し  
再びペニスが膨らみ始めた

（何やってるんだ俺は今からバイトなのに！）

俺は気を引き締めるために頬を叩く

「ふう…、そろそろいくか」

（家出る前に夏姫の顔が見たいな…）  
そう思い部屋を出ようとすると夏姫が丁度やってきた

「お、太一もうバイトへ行くのかー」

「帰り気を付けてな」

「……………」

俺は夏姫の谷間を見て石のように固まる

「どうした太一…？、バイトいけないのか？」

「夏姫…、お前ブラは…？」

日焼け跡がくっきり残る谷間に  
視線が吸い込まれる



「汗で気持ち悪かったから脱いだままだけど  
どうかしたか…？」

「どうかしたじゃないよ！、この家には男が二人も住んでるのに  
女がそんなに肌見せてたら駄目だろ！！」

あまりにも無防備な幼馴染に一喝する



「なんだよ太一、母ちゃんみたいな事言って  
二人は家族みたいなもんだし良いじゃねーか  
外出る時はちゃんと着るし」

分かってない！夏姫は全然分かってない…！

「夏姫は自分のこと男みたいに思ってるかもしれないけど  
もう十分大人の女性なんだ…！」

「な、何だよ急に…！」

「急じゃない…！」

俺はずっと前からお前を女として見てるよ！

だからさっき夏姫のおっぱい見てめちゃくちや勃起したし！  
夏姫に手コキしてもらえてめちゃくちや精子出たんだよ！」

今まで言いたかったことを全部吐き出してやる…！



「なあ……!？」

夏姫の声が裏返し顔も紅潮させていく

「何言ってるんだよ太一…、それじゃなんか俺の事…  
女の子として意識してるみたいじゃん!」

「だからそうだっていつてるだろ!」  
「そんなエロい胸見せられて兄弟でいられるわけないだろ!」

「あうう……!」

更に赤面し動揺する夏姫

「で、でも…、俺だぞ…、  
女らしくないし可愛くないだろ!」

「俺は夏姫の顔凄い好みだぞ!  
八重歯もポニーテールも性格も全部好きだ!」





「わわわ…分かった、分かったからこれ以上言わないでくれ！  
恥ずかしくて死んじゃうぞ…！」

「はあはあ…」

（正直殆んど何言ったか覚えてないけど結構やばい事言ったかも…）

「家でもちゃんとブラ付けるよ…  
それで良いだろ…」

「ちゃんと谷間も見えないようにジッパ―上げるんだぞ！  
あとパンツもエロいから下もなんか履けよ！」

「うううう…、わかったあ…」

まるで小動物の様に夏姫は萎縮し  
大事な所を両手で隠し始めた

